

博士学位論文審査等報告書

審査委員	主査	東 あかね	印
	副査	木戸 康博	印
	副査	南山 幸子	印
	副査	市川 寛	印

1 氏 名 岡見 雪子

2 学位の種類 博士（学術）

3 学位授与の要件 学位規程第3条第4項該当

4 学位論文題目 Study of irritable bowel syndrome and lifestyles in nursing
and
medical school students
(看護・医療系学生の過敏性腸症候群と食・生活習慣に関する研究)

5 学位論文の要旨および審査結果の要旨

【学位論文の要旨】

別紙に記載

【論文目録】

別紙に記載

【審査結果の要旨】

本研究は、過敏性腸症候群と食・生活習慣との関連を明らかにし、その改善のための介入を行い、その効果を評価した栄養疫学的研究である。

第1章では、過敏性腸症候群（Irritable Bowel Syndrome: IBS）が先進国において高頻度に見られる慢性的な機能性消化管障害の一つであることを述べ、IBSの定義及び診断基準について概説している。さらに、IBSの主要な病態が、消化管の運動異常、消化管の知覚過敏及び心理的異常であり、脳腸相関の異常による疾患であることを述べている。その上で、東アジアにおいて看護・医療系学生を対象に、食・生活習慣や不安、抑うつ等の心理的要因とIBSとの関連について研究する意義と目的をまとめている。

第2章では、日本人の看護・医療系学生において、IBSの有病割合を明らかにし、IBS群と非IBS群の食・生活習慣を比較する横断研究を行っている。その結果、IBSの有病割合が一般人口に比べて高いこと、IBS群は非IBS群より、不安や抑うつが多いこと、睡眠障害が多いこと、食事時間が不規則であり欠食が多いこと、さらに、女性において、IBS群は非IBS群より、牛乳、魚介類、緑黄色野菜、果物の摂取頻度が低く、レトルト食品や半調理食品の摂取頻度が高いことを明らかにしている。

第3章では、中国の看護・医療系学生において、第2章と同様の調査を行い、IBSの有病割合が一般人口に比べて高いこと、IBS群は非IBS群より、不安症が多いこと、睡眠障害が多いこと、食事時間が不規則であり欠食が多いこと、さらに、女性において、IBS群は非IBS群より、葉菜、果菜及び芋の摂取頻度が低いことを報告している。中国人と日本人を比較したところ、中国人女性は日本人女性よりIBSの有病割合が有意に低く、特に便秘型IBSに有意差がみられた。また、中国人女性は日本人女性より、肉類、卵、牛乳・乳製品、インスタント・レトルト食品、菓子及びジュースの摂取頻度が低く、豆・豆製品、野菜及び果物の摂取頻度が高かったことから、便秘型IBSには食物繊維の摂取量が影響していると考察している。

第4章では、看護女子学生を対象に、食・生活習慣を自己記録するセルフモニタリング（Self-Monitoring: SM）とクラス単位のグループワークによる、IBSの改善効果を評価した介入研究を報告している。対照群、2ヶ月介入群、4ヶ月介入群の3群に分け、2ヶ月介入群及び4ヶ月介入群は、排便回数、便性状、食事内容、食事時刻、就寝時刻、起床時刻及び睡眠時間を毎日記録し、記録に基づいたグループワークを週1回実施させた。介入前後にアンケート調査で介入効果を検討した結果、IBSの有病割合はどの群においても有意な増減はみられないことを示した。しかし、両介入群において、介入後に不安点数が有意に低下したこと、4ヶ月介入群において腹部症状スケール（Gastrointestinal Symptom Rating Scale: GSRS）にもとづいた腹部症状に関する主観的生活の質（Quality of life: QOL）が改善したことを明らかにしている。

第 5 章では、以上の研究を総括し、日本及び中国での看護・医療系学生において IBS の有病割合が高いこと、IBS には心理的要因が関連しているだけでなく、食物摂取頻度と食習慣が関連していること、さらに、食・生活習慣の SM によって腹部症状や不安が緩和されると結論している。

これらの知見は、現在の IBS の治療が、消化管運動機能調節薬、抗不安薬、抗うつ薬等による薬物治療中心であるのに対し、食・生活習慣の改善によって緩和される可能性と食事指導の重要性を見出したものであり、患者の QOL の向上や医療費の削減にも貢献しうると考えられる。よって、以上より、本論文は本学の博士論文として価値あるものと判断した。

6 最終試験の結果の要旨

平成 26 年 8 月 7 日（木）午後 4 時より図書館視聴覚室にて博士論文発表会を実施した。口頭発表後、最終試験として質疑応答を行った。質問内容は、調査の実施時期、解析方法、性差、病型差、食物繊維との関連など多岐に亘った。いずれにも適確に回答した。最終試験の結果、審査委員全員一致で合格とした。

7 学力の確認の結果

別紙に記載するように、学力確認を行った結果、合格とした。